

国際基督教大学に召されて*

鈴木 寛†

2007年4月3日

はじめに

国際基督教大学の鈴木寛です。英語名が International Christian University ですので、ICU とも呼ばれています。今日は、非常に個人的なタイトルにさせて頂きました。話の内容も個人的なこと、ICU という一つの大学に関するのですが、今日ここにいらっしゃるそれぞれの方々がそれぞれの受け取り方で何かをくみ取って頂ければ幸いです。

私は、クリスチャンホームに育ち、中学から高校にかけて教会から離れておりましたが、高校一年生のときに、学園紛争があり、授業も無い期間が暫く続きました。そのころ、生きる目的は、社会の不公正は、など考える中で、キリスト教に導かれました。曾祖父もクリスチャンですから4代目となります。

日本の大学を卒業してから大学院に進学しましたが、アメリカの大学で博士をとらないかとお誘いをうけ、オハイオ州立大学に留学することになりました。博士号を取得し、大阪にある国立大学に職を得たのは1980年10月1日でした。学長から辞令をもらい、すぐ学生課へ行き、キリスト教に関係したクラブがないかを調べました。聖書研究会があることを聞き、すぐその足で部室へ行ってみますと、二人の女子学生が話していました。実はそのうちの一人と三年後に結婚をしました。その大学に赴任以来、聖書研究会の顧問を務めました。教員数は300を少し越える大学でしたが、どうもクリスチャンは私一人のようでした。その大学での13年間には、様々な事がありまし

たが、学生の聖書研究会には毎週出席し、合宿にも参加し、我が家にも招いたりしていました。聖書研究会の多くの学生とは今でも連絡が続いておりますし、たくさんの思い出があります。

ICUの数学の教員の公募を目にしたのはそんなときでした。私は数学の中でも代数学の一分野である群論および代数的組合せ論を研究しておりますが、公募分野は代数学、さらに条件として「キリスト者」と書かれていました。教授会メンバーは原則的に全員がクリスチャンだということです。日本において大学などに職を持っている数学の研究者は、正確にはわかりませんが、大体2000人弱でしょうか。クリスチャンは一般的には1%未満といわれていますから20人弱となります。その中で代数学の分野となると、数人でしょうか。応募者はどのぐらいいるのだろうと考えてしまいました。

ちょっと余談になりますが、実際にはこの計算は間違っています。若くて職についていない数学者がたくさんいますし、ICUでは教授言語(教える時の言葉)は日本語でも英語でも良いことになっていますので、日本人以外の応募者もたくさんいます。特に、日本の大学で外国人を正式な教授会メンバーとして雇用し、且つ、英語で教えることも可能な大学は、最近すこしできてきましたが一般的ではありませんから、国内外から外国人の応募者もたくさんいます。また、数学や基礎科学の分野にはクリスチャンの研究者が多いのです。数学や基礎科学においては、絶対的真理の存在、且つ真理は非常に美しいことを経験的にも確信しつつ、人間が知りうることはほんのわずかな部分にすぎないことも知り、謙虚に真理追求をせざるをえないのです。このような、数学や基礎科学の分野としての性格が、信仰に生きることと通じる面が多いのだと思います。そのような理由から、ICUで数学の教員を募集すると世界各地からか

*VIP 大手町 (URL <http://www.vip-club.tv/200610/chapter/otemachi.htm>) のメッセージ (於:パレスホテル1階レストラン「スワン」
<http://www.palacehotel.co.jp/facility/access.html>)

†Electronic mail : hsuzuki@icu.ac.jp, URL <http://subsite.icu.ac.jp/people/hsuzuki/>

なりの数の応募者があります。実は、分野によっては教員の募集が難しいことは確かなのですが。

さて、その公募を見て私は、クリスチャンが1%未満のこの国で、教授会メンバーは全員がクリスチャンという条件を維持することの大変さを思い、その募集要件を満たしている私が応募する責任のようなものを感じ、結果は神様に委ねることにして応募することにしました。ご存じのように、日本には、ミッションスクールと呼ばれるキリスト教系の大学がたくさんあります。しかし、教授会メンバーが基本的に全員クリスチャンという条件を維持している大学は、神学校から最近大学になった2・3の大学を除いてICUだけなのです。

正直、当時は、この事以外に、ICUに興味を持っておりませんでしたから、もし他にふさわしい方がおられるのなら採用されなくてもよいと思っていました。どうしてもICUに移りたいという強い気持ちは持っていませんでした。しかし、少しずつICUについて調べるうちに、ICUが、日本のクリスチャンの長年の祈りと、クリスチャンとは限らず日本中の一般の人からの募金で建てられたこと。そして、北米のクリスチャンたちの祈り、さらに、アメリカ人の牧師が始めた、広島・長崎への原爆投下のつぐないのわぎとしての募金活動がある時期に、日本におけるキリスト教大学の設立運動と一緒に設立された大学であることを知るようになりました。「ICUは太平洋戦争後の不安定な時期に、国際的な視点に立ったキリスト教主義教育をめざす実験的取組として設立された。」という言葉にも出会いました。大学の設立が実験的取り組みだということです。さらに、20世紀前半に世界大戦を二つも起こしてしまったことを反省し、教育を変えなければいけないと、平和を築く人材を育てることを目的とするという願いが結実して設立されたことも知りました。そうした中で「国際的な視点に立ったキリスト教主義教育のもとで平和を築く人材を育てる」この使命に私も関わることができればとの願いが日々強くなっていきました。

ICUへ

暫くして面接のため上京し、その場で候補を私に絞り人事を進めることを告げられました。様々なことを思い浮かべながら武蔵境の駅まで戻りそこで不動産屋を一軒訪ねました。実は、ICUには学

内住宅がありますが、ちょうどそのころ新しい学科を新設したこともあり、学内住宅はしばらくあかないと告げられていたのです。我が家は子供5人の7人家族で子供達はまだ小さいことを告げると、多少不便なところでも家賃25万円ぐらいはするだろうと告げられショックでした。丁度バブルの終わり頃だったこともあると思います。大阪では国家公務員の宿舎に入っていましたから、家賃1万5千円。若い頃からシンプルライフを心がけ、一万円以上の買い物はめったにしない生活をしていましたから、よけいこの落差の大きさにショックを受け、すぐICUに戻ってお断りしようかと思ったぐらいでした。同時に「平和を築く人材を育てる国際的な視点に立ったキリスト教主義教育」の使命に私のこれからの人生をかけるといいながら、家賃の落差でショックを受けている自分あまりにも情けなくなっていました。

ICUに移るにはいくつか問題がありました。しかし、愛着という面で一番大きかったのは、聖書研究会でした。教員でクリスチャンは私一人という状態で私が去っていくこと。本当にそれで良いのだろうか。クリスチャンの殆どいないその大学で、なかなか証の機会は与えられなくても、学生の成長を見もまりながら、神様に仕えていくことが私の使命ではないのか。教授会メンバーが基本的に全員がクリスチャンとの条件を維持するキリスト教大学は立派だけれども、こうして、日本中のクリスチャンの大学教員を「クリスチャン狩り」のように集めているだけではないだろうか、とも考えました。それが善しとされるのは、特別の使命が与えられた大学、その中で、その使命に応える教育が為されるかどうかにかかっているのだろう。自分もそこに関わりながらじっくりそれを見てこよう。不遜かもしれませんが、正直それが私の正直な気持ちでした。そしてその気持ちは基本的に今も変わっていません。

ICUでの驚き

1993年10月 さて、1993年10月正式に、ICUに赴任しました。余談ですが、実はこのVIP Clubがスタートしたのも殆ど同じ時期で、アーク・タワーズのホームズさんのお宅を使わせて頂き、市村さんがリーダーとなって始めたのですが、たまたま最初の会にも出席し、おそらく2回目か、3回目の会のメッセージをさせて頂いたと記憶して

います。

その1993年10月から、13年半がたちました。前の国立大学には13年いましたので、それよりも長くなりました。特に最初の何年かは驚きの連続でした。余りにも前の大学と違っていたからです。

賓客 今でも感動として私の心に残っているのは、この大学で入学試験を行う前の日、礼拝堂に皆が集まって説明を聞くのですが、そのときに聞いた「受験生一人一人を賓客（ゲスト）として丁寧に迎えて下さい。」という学長の言葉でした。これは、ICUが創立されて間もない頃から毎年必ず言われるメッセージだとのことでした。そして、教員も職員もアルバイトの学生もこのことを心に刻み、まさに賓客として受験生を迎えるよう努力をします。新生が「私が受験した部屋の監督はK先生だったけれども非常に丁寧に、最初にまず非常口のことなどを説明して下さった、自分は感激して、ぜひこの大学で勉強したいと思った。」と言うのを聞いて、私も次の年から非常口の案内を説明の中にいれたり、少しずつ、ゲストを迎える修行をしてきた気がします。それがたとい、一回しか会わない受験生だとしても、一人のゲストとして丁寧に接することを大切にしたい大学。無論、入学してきた学生に対しても、一人一人の人生を大切に接する。そのような大学に来たことを感謝しています。

ディスコース・コミュニティ さらに驚いたのは、会議などで先生方がそれぞれ違った考え方をぶつけあって本質的な議論をする事です。特に教育に関しては、一つ一つのコースについてICUの教育全体としてそれがどのような意味をもつかというような事から議論するのです。ICUは三割程度の先生が外国の方ですから、議論の幅が広がり、英語でも日本語でも議論をする。アメリカのものとも日本のものとも違うICUの教育システムのひとつひとつがそのような議論の結果として生まれてきていることを理解するに従って考えさせられることばかりでした。英語には Discourse Community という言葉がありますが、お互いに異なるところを理解しながら議論に議論を重ねて一つの共同体を作り上げていく。そのようなものを感じました。

武田清子というICU創立時から長くICUで教えておられたかたが「未来を切りひらく大学」

(p.21) にICUについて次のように書いています。

ICUは、その創設期より矛盾・相剋する多元的要素をそのふところに内包して形成されてきた。こうした相対立し、矛盾する要素の相剋は、一つの原理が常にまかり通るというのではなくて、アンティ・テーゼの批判と対立にいかに対応するかに苦慮することを通して、自己批判と新しい自己改造をそれぞれの理念・原理・立場に要請したのであり、異質の思想・文化・理念との共生の道を模索させることとなった。

このような矛盾と相剋をいざかかえて、異質の価値観・思想・文化の共生のむずかしさを、そして、苦汁を、ことごとく体験しながら、それを避けて、乗り越えてゆかねば道が開けないという、未知の未来への模索と実験の積み重ね、共同作業がICUの50年の歩みであったと思う。

まだICUに移って間もない頃、ある問題について議論があったのですが、私が学科会議で、私はこう思う、というような発言をしたら、暫くして学長から呼ばれ「この問題について少し違う意見を持っていると聞いたけれども、聞かせてくれないか。」と言われ本当に驚きました。

「国際化」とか「共生」という言葉はよく聞かれますが、「異質の価値観・思想・文化の共生のむずかしさを、そして、苦汁を、体験しながら、それを避けて、乗り越えてゆくこと」こそが「国際化」「共生」の本質的な部分なのだと思っています。

リベラル・アーツ

しかし、一番の驚きは、ICUの教育を通して育っている学生達です。ICUには国立大学をふって入学してくる学生も少なからずいますから、最初からある程度反骨精神旺盛なのかも知れませんが、卒業していく学生は明らかに入学したときと変わっていると思います。異なった考え方や意見を受け止め、自分の頭で考えて、自分の考えを述べ、かつ他の人と議論ができるということでしょうか。

ここで少し「リベラル・アーツ教育」について説明したいと思います。ICUは一言で表現すると「日・英二言語で、リベラル・アーツ教育をする大学」と言われます。大学の資料（教養学部要覧）からの引用です。

教養学部 College of Liberal Arts は、次のような質の教育をめざしている。すなわち真理の探究において、神以外のなものをも神（絶対的価値）とせず、そのゆえにどのような論理をも考えかたをも、自由にかつ冷静に研究対象とすることのできる主体的自由を堅持し、他の学問分野あるいは他の文化に対して開かれた意識をもち、総合的判断力と創造的な思考力を持つ人、そしてさらに、人の尊厳を確立し、社会正義を実現するために新しい社会と世界の形成に積極的に参与し貢献することのできる人をつくる教育である。

リベラルは自由の意味ですが、リベラル・アーツ教育は「閉鎖的・排他的・自己中心的な価値観から解放され、開かれた価値観を築いていくこと」とも表現されています。ステレオタイプ（固定観念）にとらわれず、権威主義にも陥らず、論拠を明確にして意見を述べ、同時に謙虚に他者の考えから学ぶということでしょうか。日英両語の能力を身につけることとなっていますが、それも、単にコミュニケーションができることを目的とせず、相異なる文化背景のものを積極的に学び、かつ発信する。リベラル・アーツのためにも二言語教育と位置づけています。

啓蒙 我が家では、毎週一回学生と、聖書を学ぶ会を持っています。ディスカッションスタイルで、聖書の箇所を読み、私が質問を用意しておいて、一緒に考えるという形式を取っています。話はいろいろな方向に飛ぶことがしばしばですが、ある時、平和の話になり、エマニュエル・カントの「永遠平和のために」という小論の話にとびました。出席者はわたし以外4人でしたが、そのうち、3人がその小論を読んだことがあり、その中味に入った議論になっていったのです。3人とも全く別の分野の学生でしたが、それぞれ違った観点から論じ、その小論を読んでいない私は置いてきぼ

りでした。あわてて最近出た、中山元訳の「永遠平和のために／啓蒙とは何か 他3編」を買って読みました。最初は「啓蒙とは何か」ですが、その小論に、啓蒙の定義として次のように書かれています。

啓蒙とは何か。それは人間が、みずから招いた未成年の状態から抜け出ることだ。未成年の状態とは、他人の指示を仰がなければ自分の理性を使うことができないということである。人間が未成年の状態にあるのは、理性がないからではなく、他人の指示を仰がないと、自分の理性を使う決意も勇気も持てないからなのだ。だから人間はみずからの責任において、未成年の状態にとどまっていることになる。こうして啓蒙の標語とでもいうものがあるとすれば、それは「知る勇気を持って」だ。すなわち「自分の理性を使う勇気をもって」ということだ。

まさに、ICUでの教育は、リベラライズの教育、エンライトメント（啓蒙）の教育なのだと意識させられた瞬間でした。

キリスト教

自由にして敬虔 ICUの宣伝のようなお話しになってしまいました。最初に教授会メンバーはすべてクリスチャンという条件を課している事の功罪を考えると、特別な使命が果たされていなければならないと思っていると申しました。

確かに神様が愛しておられる一人一人を大切に教育も、一人一人が異質の価値観・思想・文化のもとで生きていても、互いに愛し合い共に生きていくためにはその困難に立ち向かい、乗り越えてゆかなければならないことも、神以外の何ものも神とせず、閉鎖的・排他的・自己中心的な価値観から、開かれた価値観を築いていくこともすべてキリストの教えなしには生まれてこなかったのではないかと思います。

ICUでは大学の使命を（ホームページ）

国際基督教大学は、キリスト教の精神に基づき、自由にして敬虔なる学風を樹立し、世界人権宣言の原則に立ち、国際的社會人としての教養をもって、神と人と

に奉仕する有為の人材を養成し、恒久平和の確立に資することを目的としています。

としています。

この「自由にして敬虔」について皆さんはどのようなイメージを持ちますか。私はこの「自由にして敬虔」というフレーズについて、考えることを最近の課題にしています。

イエスは自分を信じたユダヤ人たちに言われた、「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうにわたしの弟子なのである。また真理を知るであろう。そして、真理はあなたがたに、自由を得させるであろう。

(聖書：ヨハネによる福音書 8:31, 32
日本聖書協会 口語訳)

ここに「真理」と「自由」が出て来ます。「真理はあなたがたに、自由を得させるであろう」のラテン語は“Veritas vos liberabit” (veritas = 真理, vos = あなたがた, liberabit = 自由) です。先日、首都大学東京に行きましたらその図書館にもこの言葉のレリーフが大きく掲げられてありました¹。

さてこの聖書の箇所では「イエスの言葉にとどまっていれば、イエスの弟子だ。」と書いています。イエスの言葉にとどまっていれば、真理を得、自由を得る、というのです。この言葉から考えると、敬虔とは「イエスの言葉にとどまっている」ことではないかと思えます。それが、イエスの弟子であることの証明です。

自由は大抵だれでも好きな言葉ですが、ここでは自由のみなもとは「イエスの言葉にとどまっていること」だと言っています。つい何の束縛もない状態を自由だと考えがちですが、マルチン・ルターも「キリスト者の自由」の中で、何々からの自由だけではなく、何々への自由について述べていますが、自分勝手な生き方をすることが自由ではないことは明白です。

¹ 国立国会図書館など多くの図書館がこの言葉を掲げている。東京文化学園の紋章。Johns Hopkins 大学の大学の言葉。専修大学図書館生田分館では「宗教」を離れ「真理が無知・偏見から我々人間を解放し自由にするを願う」Veritas nos (我々を) liberabit としている。

さて、確かに、ICU の教育はこのような聖書の言葉によっていることは確かですが「自由にして敬虔」の「敬虔」のほうは、ICU のなかでどのように育まれるのでしょうか。どのようにしたら育むことができるのでしょうか。これが私が今考えていることです。

大学の資料(教養学部要覧)からキリスト教への使命の一部を抜き出してみます。

ICU は高等教育の場である。であるから、キリスト教信徒をつくることを基本的な目的にしてはいない。しかし、この大学に学ぶ者の一人ひとは、学園生活を通して個々の人生や社会生活の中における神の存在とその力に、目をひらくよう呼びかけられている。この呼びかけはこの大学からのそれぞれの学生への挑戦である。それはキリスト教の立場からなされる挑戦であるが、学生がおのおのみずから真理を求め、学生がそれぞれ見出した真理に身を捧げるものとなること、それがこの大学の願いである。

学園生活が「よびかけ」そして「チャレンジ」を提供する場だと言っています。確かに、教授会メンバーがすべてクリスチャンという大学でこのような「よびかけ」「チャレンジ」が満ちあふれている状態は、まさにこの使命が果たされているということでしょう。しかし、現実には、残念ながら、ちょっと寂しいのではないかと思います。

タイワークキャンプ

ICU では毎年、タイのパヤップ大学というキリスト教系の大学と協力してワークキャンプを実施しています。この春は三男の受験で参加できませんでしたが、昨年は私も参加しました。そのときは次男も一緒でした。昨年は第25回でしたから今年は26回目、ICU からは大体25名、パヤップ大学からも学生25名にスタッフが加わり、山地族の村で家に分宿し、教会堂を建てるというプロジェクトです。タイは90%が仏教徒ですが、山地族は半数近くがキリスト教徒だと言われています。私たちが行った村も全員がキリスト教徒だと言っていました。参加する学生の大多数はクリスチャンではありませんが、朝と晩と礼拝をし、クリスチャンキャンプとしてすすめます。土台と棟上げまで

は、パヤップ大学の大工さんと村の人とですませたところに乗り込むのですが、トイレの穴を掘り、セメントを捏ね、河原から石を運び、ブロックを積み上げ、献堂式まで、おなかをこわす学生も多く、体調管理も大変ですが、そこは、26回も続いているキャンプ、サポート体制もしっかりできていて、大きな事故もなく毎年続いています。村の人との交流も、パヤップ大学の学生との交流も、学生一人一人にとって大きなチャレンジになっていると思います。私にとっても、2週間ほどですが、一緒に過ごした学生は特別。これが「神の存在とその力に目をひらくような」呼びかけになっているかはわかりませんが、一つのチャレンジを与えているとは感じています。

世界の平和・地球の環境・貧富の差の問題に強い関心を持っている学生も多く、さらに、できればそのような問題の解決に関わるような生き方をしたいと願っている人も多いのです。しかしまだ現実を見る機会に出会っておらず、自分の造られた目的を知り得ていないのではないかと感じています。

タイ・ワークキャンプのような、現実を自分の目で見て語り合い共に分かち合い、神様が愛されている様々なひとびととじかにふれあうことを通して、神様が自分を造られた目的を知り「夢」を持つことになるのではないかと期待しています。私はまだ2回しか参加していませんが、これからできるだけこのような活動に参加していきたいと思っています。

私のもとめるもの

今日は、ICU の話をさせて頂きましたが、先ほども言いましたように、ICU でも日常の学園生活に関する「呼びかけ」「チャレンジ」が感じられなくなっていると、クリスチャンの学生からも、クリスチャンではない学生からも聞かれるようになっていきます。ICU での一番の課題ではないかと思えます。みなさんはこの「呼びかけ」「チャレンジ」をどう思われますか。「問いかけ」とも言われることもありますし、生き方によるチャレンジはさらに大切かも知れません。ICU の初期にはこれが満ち満ちていたと言われます。みなさんの中にはクリスチャンのかたも、そうでない方もおられると思います。「呼びかけ」「チャレンジ」が感じられますか。「地の塩」「世の光」となっている

でしょうか。「塩のきき目がなくなったら...外に捨てられて、人に踏みつけられるだけ²」だ。とあります。ICU もそこにいる私も、そのようにならないように、次の世代をになう学生達と日々接しながら、呼びかけを続けていきたいと考えています。

マザーテレサのことば

最後に、まさに、そのようなチャレンジを与え続ける生き方をしたかたの言葉として、「インドのコルコタにある『孤児の家』に掲げられているマザー・テレサ言葉」を読ませて頂いて終わりたいと思います。

人々は理性を失い、勝手に自己中心的です。

それでも彼らを愛しなさい。

あなたがした良い行いは、明日には忘れられます。

それでも良い行いをしなさい。

誠実で、優しいがゆえに、あなたは簡単に傷つくでしょう。

それでも、誠実で、優しくありなさい。

歳月をかけて建てる建物が、一晩で壊されてしまうことになるかもしれません。

それでも建てなさい。

本当に助けが必要な人々ですが、彼らを助けたら、彼らに襲われてしまうかもしれません。

それでも彼らを助けなさい。

持っている一番良いものを分け与えると、自分はひどい目にあうかもしれません。

それでも、一番良いものを分け与えなさい。

²マタイによる福音書 5:13 (口語訳)